

現代日本の「自発的隷従」

『自発的隷従論』の西谷修さん解説の続きである。

ラ・ボエシが語る「圧政」は、もちろん近代の国民国家以前の支配秩序を想定している。けれどもかれが照らし出すのは、どんな支配形態のもとであれ、圧政を生み出し支える諸要素の非制度的な関係についてであり、ひとつの支配秩序が支えられ永続化されることの内的かつ構造的な秘密である。だからそれは、20世紀の全体主義的秩序の批判的解明に示唆を与えることができたのだが、それだけでなく、世界戦争以後のグローバル秩序における超国家的（そう言ってよければトランス・ナショナルな）支配関係のからくりをも同じように照らし出す。だからこそ、ラ・ボエシの言う「自発的隷従」が今日の日本できわめて啓発的な意味をもつのである。



いまや日本には「対米追従」しか選択肢がないかのような、この「アメリカ同調」圧力はどこから来ているのか。----- 多くの人びとは日本を打ち負かしたアメリカの強大さと華やかな「文明」に魅了され、アメリカに憧れ、アメリカに従い、アメリカを見習って、何でもアメリカ風にすることをよしとするようになった。その風潮は二世帯、三世帯にわたって引き継がれて今日にいたっている。ここでラ・ボエシを聞いてみよう。

人はまず最初に、力によって強制されたり、うち負かされたりして隷従する。だが、のちに現れる人々は、悔いもなく隷従するし、先人たちが強制されてなしたことを、進んで行うようになる。そういうわけで、軛のもとに生まれ、隷従状態のもとで発育し成長する者たちは、もはや前を見ることもなく、生まれたままの状態に満足し、自分が見いだしたものの以外の善や権利を所有しようなどとはまったく考えず、生まれた状態を自分にとって自然なものとするのである。（本書 35 頁）

これが稀な「親米国家」形成とその持続の秘密ではないのか。とりわけ、その「隷従状態」に利益と安逸を見出す者たちにとってはこの体制は「自然」なものである。（アメリカが世界の覇者だったからなおのことそうだ）。

ラ・ボエシはこうも言っている。卑怯よりも卑しい、名指されない悪徳と。「----だが、圧政者のまわりには、こびへつらい、気を引こうとする連中である。この者たちは、圧政者の言いつけを守るばかりでなく、彼の望む通りにものを考えなければならぬし、さらには、彼を満足させるために、その意向をあらかじめくみとらなければならぬ」

ない。連中は、圧政者に服従するだけでは十分ではなく、彼に気に入られなければならない……」(70頁)。こういう手合いが、冷戦終結後20年を経たいまも旧態依然の日米関係を不問の前提のようにして支えている。それは日本におけるかれら自身の地位が、この永続的とも願われているらしい従属関係を足場にしてしているからである。

もちろんこれはラ・ボエシが論じているような一国の支配秩序を超えた話である。だが、世界戦争以後のとりわけグローバル化した世界では、支配秩序は一国規模にとどまらない。占領下の日本の統治がアメリカの権威のもとに置かれていたように、そして冷戦下でアメリカが「自由世界の盟主」であり、日本がその「核の傘」の下にあったように、日本の統治構造、それに支配層やエリート層にとっては、アメリカ(とその大統領)は他でもない世界秩序の頂点に立つ「一者」にあたっている。そしてその「一者」の支配秩序を日本に浸透させ、日本を他に類のない「親米国家」に仕立て上げているのが、支配エリートたちのこの「自発的隷従」なのである。ラ・ボエシの暴露してみせた支配秩序のメカニズムが、こうして現代の国際環境下における日本の統治のあり方をみごとに照らし出している。「自発的隷従」という言葉ほど、この事態を把握するのに適切な表現はないだろう。

(2015年6月25日)